

印旛沼流域・再生大賞受賞報告会

平成 30 年 1 月 26 日（金）
千葉県印旛合同庁舎 2 階大会議室
午前 11 時 55 分~12 時 10 分

水草バンクシステムを構築し印旛沼の在来植物を再生する取り組みなどに対して受賞致しました

まず、当会が設立したのは、平成 12 年 3 月 30 日千葉県の認証を受け、4 月 11 日 法人登記をして設立。佐倉市では 2 番目に設立した NPO 法人で、現在 17 年目です。

設立の目的は

印旛沼の水質浄化のための啓発と 未来を担う子供たちに自然豊かな水辺・印旛沼環境を引き継ぎたいという目的で活動を行ってきました。

今まで色々な活動をしてきましたが主なものは

- ①一つ目 環境フォーラム、研究会、講演会の開催
- ②二つ目 印旛沼の水質汚濁発生源対策としての無洗米普及活動
- ③三つ目 学童・主に小学生への環境体験学習の実施
- ④四つ目 印旛沼べりに笠井記念舟戸水草園を造成し、学校との水草バンクシステムを構築し活動中です。

具体的な内容

★当会が活動を始めた当時は、印旛沼汚濁の原因の多くを生活排水が占めていました。その中でもコメのとぎ汁の割合が多かったのです。そこで、水質浄化の取り組むべき方向を会員アンケートにより調査をした結果、コメのとぎ汁を減らすため無洗米を普及させる案が出されました。その頃私たち始め無洗米の認知度が低かったのですが、工場の視察やメーカーの講演会を開き BG 無洗米の普及に努めました。

小中学校 33 校、幼稚園 13 カ所、保育園 13 カ所に説明して採用をお願いしました。結果は保育園 1 カ所、コンビニ 3 か所、そしてお米屋さんへの納入を果たしました。また地域のイベントなどに出向き試食説明を行いました。

★その後下水道や合併浄化槽の普及により、生活系排水の汚れの割合が低くなり、水質汚濁よりも、水環境や生態系の豊かさが重要視されるようになりまして、世の中の考え方が変わっていきます。

★特に小学生に対する環境体験学習に力を入れました。休耕田を借りて稲作体験を8年しました。又、笠井記念舟戸水草園にある人工浅瀬いかだの上で水草説明や実際に水草を触れてもらうなどです。

夏休みに「屋形船に乗って印旛沼体験」では家族と共に沼の水の透明度や、植物に触れ、鳥、魚を観て沼の風やにおいを感じてもらい、感じたことを俳句に歌って提出してもらい、優秀作品を選んでいんばぬま流域環境フェアで表彰式を行いました。又学校への出前講座をして、次世代に印旛沼の大切さを繋げる努力をしています。

学校へのアプローチとして「水草バンクシステム」を構築しました。流域小中学校19校の池にアサザを移植する活動は印旛沼の豊かな生態系の再生を目指すとともに、子供たちの学校と印旛沼を繋ぐアイテムとして効果を上げています

「水草バンクシステム」とは、印旛沼にかつて生息し、今は絶滅危惧種となった当会が保全・育成している在来水草を学校に移植します。増殖したら印旛沼本体に戻すというシステムです。当初は沈水性水草でしたが平成15年から黄色い可憐な花を咲かせるアサザを移植しています。

和田小学校、寺崎小学校。今年は更に間野台小学校からのアサザがふるさと広場下で千葉県が整備している水草園に、お里帰りしたことは長年の積み重ねの賜物と、最大の喜びです。今は実験段階で県市の協力を頂き会員と移植しましたが、今後は子供たちが直接移植をすることで更に印旛沼に足が向くように。生態系保全活動をしていこうと思います。

17年間で形に残すことが出来たものがあります

- ①貴重な水草の教本とも言えると自負しています「設立10周年記念誌・印旛沼の水草の変遷～笠井貞夫先生を偲んで」を発刊しました。
- ②印旛沼では絶滅したオニバスが、笠井先生宅で保存している、水槽の土の中から発芽しました。この発見が千葉生物誌に論文発表され、また、そのオニバスが千葉県中央博物館の標本として登録されました。

★現在継続して力を入れているのは小学校との「水草バンクシステム」と、笠井記念舟戸水草園を維持する為に周辺の「かつぱ公園」の整備です。

国交省、県、市による「かわまちづくり」計画の中に拠点の1つとして、舟戸水草園近くが記されているので、この計画が実行されるまで、「かつぱ公園」を整備。ベンチや花壇を造り、草刈など、毎月活動をしています。ここは水辺に一番

近く触れることが出来る場所ですので大事にしたい場所です。

ここまで様々な活動の一部を発表させていただきましたが、
今迄の NPO いんばの活動から、私が学んだことは継続すること。地道にコツコツが成果を上げる近道だと思います。

印旛沼の環境を残すために様々な活動して参りました。

当会が17年間に実施したことと、沢山のグループが印旛沼を大切に思って研究活動していることが、それぞれ違うように見える事であっても、その点と点を繋げれば、大きな力になるのではないのでしょうか。印旛沼が親水公園として憩いの場になれるようこれからも活動を継続したいと思います。

報告者 事務局長 園原悦子